

キャンパる

ホームページ <http://my-campal.com/top/>
メール campal@mainichi.co.jp

旅館に張られたポスターを見ての参加がほとんどで、SNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)による告知で知った人も。昨年まではこのような積極的なPRはしていなかったが、今年には新たな取り組みとして、宣伝に力を入れた。

例年、外国人観光客に人気がある台東区の旅館「澤の屋」を会場として開催。1日に10人ほどの予約が入った。参加者の年齢は下は7歳から上は70代までさまざま。出身地は米国が多く、その他はヨーロッパやアジアなどからの申し込みもあった。

東洋学園大学(東京都文京区)で、5月30日から5日間、「Shodo Experience(書道エクスペリエンス)」というプロジェクトが行われた。訪日外国人旅行者をおもてなしするために、学生が英語で書道を教える。現代経営学部の学生約20人が授業の一環として、拡大する訪日外国人旅行者市場に対する取り組みとして2年前に始動。企画から運営まで、学生が中心となって行う。

書道エクスペリエンス



学生の指導を受けながら、自分の名前の漢字の当て字を筆で書く外国人観光客—東京都台東区の旅館「澤の屋」で

旅館に張られたポスターを見ての参加がほとんどで、SNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)による告知で知った人も。昨年まではこのような積極的なPRはしていなかったが、今年には新たな取り組みとして、宣伝に力を入れた。

例年、外国人観光客に人気がある台東区の旅館「澤の屋」を会場として開催。1日に10人ほどの予約が入った。参加者の年齢は下は7歳から上は70代までさまざま。出身地は米国が多く、その他はヨーロッパやアジアなどからの申し込みもあった。

年生の鈴木正人さんは「大事なのは英語を使うことに必死になることではない。伝えようという姿勢と笑顔。言葉が伝わらなくても意思疎通ができることに感動した」と語る。

このプロジェクトの魅力を学生たちに尋ねると、「達成感」と口をそろえた。準備段階から大きな壁がたくさんあった。それをみんな乗り越えて話してくれた。

なん?!? 一筆入魂 素晴らしい

がち。書道という、私たちがとって当たり前のことの価値に気づくことが自信につながり、主体性を持つようになる」と語る。

異国語で交わされた会話はたどたどしくても、確かに思いは伝わっていた。記者も取材中、それを感じることができた。これらの経験はお互い大事な思い出となり、学生たちを支えていくことだろう。(早稲田大・廣川萌恵、写真は聖心女子大・高井里佳子)